

# ベルゲン大学における学際的スーダン研究 —環境・開発・人類学—

縄田 浩志

1998年10月にノルウェーのベルゲン大学(University of Bergen)を訪れる機会を得た。ベルゲンは首都オスロに次ぐ第二の都市で、フィヨルドにいく観光客の拠点ともなっている。

ベルゲン大学には、現在、スーダンに関係する研究に携わる多くの研究者が集まっている。その分野は、歴史学、考古学、人類学、地理学、植物学など多岐にわたる。さらに、実際に訪れてみて感銘を受けたことは、「人文・社会科学系」と「自然科学系」の研究が有機的にリンクし、なおかつ「ノルウェー人」と「スーダン人」の密接な連携の上に成り立つ共同研究を20年以上にわたり行ってきたことであった。長年の着実な積みあげが生み出した「学際的スーダン研究」には学ぶことが非常に多いと思われた。以下では、それらの簡単な紹介を行いたいと思う。

### 歴史学

スーダン研究の一つの大きな流れは歴史学にある。その中心的な役割を果たすのは、ショーン・オファーヒー(R. S. O'Fahey)である。オファーヒー教授はアイルランド人であるが、1971年

以来ベルゲン大学に所属している。著作には『ダール・フルの国家と社会』や19世紀までのスーダンに関するあらゆる史料の紹介を行ったものがあり、スーダンの歴史研究者として現在もっとも著名な人物の一人と言える。私が訪れた折には、アメリカへ出張中でお目にかかれなかったが、私が留学していた頃ハルトゥームで一度お会いしたことがある。その時、誇らしげに「もはやスーダン研究の中心はイギリスではなくベルゲンである」と語っておられたのを思い出す。

ベルゲン大学のスーダン史家らは、スーダン国立文書館前館長のアブー・サリームそして現館長のアリー・サーリフ・カッラルとの親密な関係を構築した。そのため、文書館の史料は現在、オファーヒー教授の息がかかった前・現館長を中心としたスーダン人研究者らによって押さえられているといっても過言ではない。

人的交流のみならず一種の「史料交流」も存在し、ベルゲン大学にはスーダン古文書のコレクションがある。ハルトゥーム大学では紛失しており、私が長らく探していたナウム・シュカ

イル『スーダン古代史・近代史・地理史』というアラビア語本などをコピーすることができた。

一方、アンダース・ベールクロ(Anders Bjørkelo)は、19世紀トルコ支配期のスーダン北部地域の研究を行う。1996年に他界したリチャード・ヒルの著作の再販のための編集を現在行っているというお話しをしてくださった。

また、1988年には学内に中東・イスラーム研究センター(The Center for Middle Eastern and Islamic Studies)が設立され、*Sudanic Africa*という雑誌も発行している。そこには、マフデー運動に関連したコルドファーン北部の政治組織の歴史で博士号を取得したばかりのスーダン人アフマド・アブー・ショウク(Ahmed I. Abu Shouk)が研究員として務めていた。彼も編者として加わり、スーダン国立文書館所蔵のスーダン東部カッサラとガダーリフ地域の20世紀前半の文書をまとめた本が、1997年にカイロで出版されている。

### 考古学

ノルウェー人によるアフリカ

考古学の先駆者は、ケニアやタンザニアで石器時代の遺跡調査を中心に活躍したクヌート・オドナーである。スーダン考古学を始めたランディー・ハーランド (Randi Håland) はその弟子にあたり、ダール・フルにおける民族考古学的調査と平行して、ハルトゥーム大学の考古学科において 1972-5 年に講師を務めた。それ以降 10 年にわたり、アトバラ川とナイル川の合流点付近の新石器時代の遺跡の発掘に関わり、その成果は『新石器時代のスーダンにおける社会経済的差異化』や、アヌワール・アブドゥル・マージド (Anwar Abdul Magid) との共著である『スーダンのナイル川とアトバラ川沿いの水利用文明の遺跡』にまとめられている。

スーダン人のアヌワール氏は、ベルゲン大学で博士号をとり 1989-93 年にはハルトゥーム大学の考古学科に所属していたが、現在はベルゲン大学に戻っている。ソルガムなど栽培植物のドメスティケーションに関する考古学的研究で知られている。また、植物学者らと共同で行った紅海丘陵での調査結果も公に成りつつある。今回の私の滞在中には大学の関係者に紹介していただくなど多くの労をとっていただいた。

ランディー・ハーランドやアヌワール・アブドゥル・マージドによる発掘調査は、ノルウェー外務省の下部機関である NORAD (the Norwegian Agency for International Development) からの助成により運営されてきた。

このようにベルゲン大学には、

内外からスーダンの歴史学・考古学を専門とする研究者が集まっていた。それではベルゲン大学でスーダンの調査や研究が組織的に進展してきたきっかけは何だったのだろうか。

それは、社会人類学者フレドリック・バルト (Fredrik Barth) にある。

### 社会人類学

バルトは、民族間関係を考える場合に「ニッチェ」の概念を持ち込んだエスニック・バウンダリー論で名高いノルウェーを代表する社会人類学者である。パキスタン、イラン、オマーン、ニューギニアなどでの調査が知られている。

1960 年代には UNESCO の客員教授としてハルトゥーム大学で教鞭をとると同時に、FAO の専門家として地学者・水路学者・農学者らと共同でスーダン西部ダール・フルの開発計画のための調査研究を行い、その成果は『人的資源—ジャバル・マッラ地域の社会的文化的特徴』として明らかにされている。

フル族の農耕をけっして自立的な生業形態と見なすことなく、換金作物の役割や商人との関係を重視しながら、社会関係を描き出している。そこには、やはり資源利用に根ざした民族のニッチェを実証的にとらえているという姿勢がうかがえる。それは、バルトが古生物学という自然科学の教育を受けてから社会人類学に移ったという経歴とも関係しているようである。「人文・社会科学系」と「自然科学系」の共同研究の原形はすでにこの時代にできていたのであ

る。そして、このようなアプローチはその弟子達に継承されていた。

ジャバル・マッラ地域のプロジェクトにバルトと共に参加したグンナー・ハーランド (Gunnar Håland) は、フル族と周辺民族に関する多くの著作や論文を著している。そこでは、同地域で異なったニッチェを利用する農耕民フル族と牧畜民バッガーラ族の間では対立関係が生まれないのに対し、同じ生業形態を持つフル族とザガーワ族の関係は民族的対立を生むことなどが明らかにされた。

さらに、民族間関係に注目した資源利用に対する問題意識は、グンナー・セルベ (Gunnar Sørbo) による研究においても深められた。スーダン東部ボターナ地域で 1960 年代末以降アトバラ川にダムを建設することによりニュー・ハルファ農業生産計画とよばれる大規模灌漑農耕が始まった。原住民であるラクダ牧畜民シュクリーヤ族は、アスワン・ハイダムの建設に伴って水没したワーディー・ハルファから移住してきたヌビア族との共存を強いられた。そして、政府が土地を没収するという過程を通じて、もっとも肥沃であった放牧地や伝統的農耕地は失われ、社会構造や生業形態に大きな変化がおとずれたことを指摘した。

これらを概観してみると、ベルゲン大学の社会人類学者らは、歴史学や考古学者との密接な共同研究体制を構築しながら、乾燥・半乾燥地域の生産システムと民族間関係をスーダンの西部から東部へと次々に調査してき

たといえる。それらの地域は、イスラーム文化圏と非イスラーム文化圏が交差する中で、複数の民族が広域ネットワークを発達させた複雑な社会であった。閉じられた社会としてスーダン南部の民族の社会構造を中心に、植民地時代から独立直後にかけて調査を行ってきたイギリスの社会人類学者らと比較した場合、この点がノルウェー人による研究の対照的な特徴といえるであろう。現在、社会人類学科は、教官20人程、大学院生100人近くを抱える大所帯である。なお、民族誌を中心として学科から出版されているシリーズは、50冊以上にのぼる。

#### 「紅海地域プログラム」

このようにして、スーダンにおける研究を積み重ねてきた社会人類学者らが、自然科学系の研究者と共同できる体制を形作ったのは、「紅海地域プログラム(The Red Sea Area Programme)」を通じてであった。

1980年代前半、北東アフリカをひどい干ばつと飢饉が襲った。スーダン東部は中でも最も悲惨な地域の一つであった。そして、その主要構成民族であるベジャ族は、都市への流入を一段と進め、市場経済や援助物資への依存度を高めた。いち早くベジャ族に対する援助を始めた機関の一つはノルウェー赤十字であった。そのような状況下で、1987年からは紅海地域プログラムが始まったのである。

ベジャ族とは、東は紅海、西はナイル川本流とアトバラ川、南はエチオピア高原、そして北は

エジプト東部沙漠に囲まれた地域を生活圏としてきた民族である。その現在の居住地は、エジプト、スーダン、エリトリアの3カ国にまたがっている。紅海地域プログラムが対象とした調査地は、紅海丘陵にあるシンカート周辺であった。場所は異なるものの、私も同じベジャ族において調査を行ってきた。

ベルゲン大学においては開発研究センター(Centre for Development Studies)、ハルトゥーム大学ではこのプロジェクトのための委員会が設置され、プログラムは共同運営された。プロジェクトのリーダーを務めたのは、現在は社会人類学科教授で少し前までは開発研究センター所長でもあったレイフ・マンガー(Leif O. Manger)である。マンガー教授は、1976年にはコルドファーン北部のオアシスにおいて、そして1979年から84年にかけてヌバ山地南部で調査を行い、『山岳から平地へ—ラフォファ・ヌバ族のスーダン社会への統合』という民族誌で知られている。また、17世紀から現在までのジャッラーバ商人の活動を扱った『スーダンの交易と商人』また『ムスリムの多様性—グローバル・コンテクストにおけるローカル・イスラーム』(近刊)など多数の本を編集している。

#### 植物学・地理学

紅海地域プログラムでは、1) 植物学者は植生の長期変化に関して研究すること、2) 自然地理学者は雨量、地形、地質、土壌、水文などのデータを得ること、3) 人文地理学者と社会人類学者は、

伝統的な側面からと近代的な側面から農牧システムをとらえることにより人間の適応戦略を把握すること、が目的とされた。

リモート・センシングを用いてランドスケープの分析を進めた植物学科助教授のクヌート・クルズウィンスキー(Knut Krzywinski)、そしてこのプロジェクトに加わりスーダン東部の植物に関する博士論文を完成させ現在植物学科研究員のオレ・ベタース(Ole R. Vetaas)らが参加した。また、人文地理学の大学院生(Vibeke Vågenes)はジェンダー研究を行った。

このプロジェクトの結果、ベルゲン大学では修士論文5本、博士論文2本、ハルトゥーム大学では修士論文9本、博士論文1本が提出され、双方の研究者の育成が堅実に行われた。私が訪れた時には、ハルトゥーム大学から薬学を学びに来たばかりの修士課程のスーダン人女学生に出会った。また数年前から、ベジャ族の学生がランドサットの分析法を学ぶため留学してきている。彼の父親は、現地出身民族による初のトータル州知事を務めた方である。

プロジェクト進行中には、ハルトゥーム大学出版から9冊のテクニカル・ペーパーが出版され、3回のワークショップに提出されたペーパー集もまとめられた。そこでは、研究成果が開発計画のプランナーにも役立てられることに留意されている。そして、最終的には、スウェーデンのウプサラにある北欧アフリカ研究所(北欧諸国の共同出資により設立)から、『乏しい資源での生存—紅海丘陵のハグドゥウ

族の牧畜』(Leif Manger with Hassan Abd el Ati, Sharif Harir, Knut Krzywinski & Ole R. Vetaas. 1996. *Survival on Meagre Resources: Hadendowa Pastoralism in the Red Sea Hills*. Uppsala: Nordiska Afrikainstitutet)として出版されたのである。

しかし、その本で明らかにされた内容の具体的で実証的データは、多くの未出版のペーパー、NGOへのレポート、博士論文などを参照するしかなかった。それが、ベルゲン大学を実際に訪問して資料収集を行った理由であった。マンガー教授のご厚意で合計1万ページにも達しようという量の資料をコピーさせていただいた。

#### 学際的研究と開発

それでは、学際的スーダン研究が人類学を中心として発展していった経緯はどのようなものだったのだろうか。

1975年から、ベルゲン大学は前述のNORADからの資金援助を受けて「サバンナ・プロジェクト」を組織し、スーダンの社会経済研究協議会、開発研究調査センター、社会人類学科との協力関係の下に、サバンナ地域の生産システムや開発に焦点をあてた調査を行ってきた。そこでは伝統的生産システムだけでなく、農業の機械化や労働者の移住の問題なども扱われた。

そして、1981年にはベルゲン大学とハルトゥーム大学間で協定が結ばれ、調査研究の情報交換、修士・博士課程の大学院生の教育、スタッフの交換、共同研究プロジェクトの運営が行われ、

それまでの人類学、考古学、歴史学に加え、植物学、地理学、宗教学、薬学、心理学、水産学、アラビア語学などへと協力分野が広がっていった。

さらに、1980年代前半にアフリカを襲った干ばつからの回復を目的にノルウェー政府が打ち立てたThe Sahel-Sudan-Ethiopia Programmeの一環として、前述の紅海地域プログラムが立ち上げられたのである。このプログラムでは、国会における以下のような決議にもとづいた資金運営がなされた。1) 国際機関に対する援助(全援助額の内の50%)、2) ノルウェーのNGOとそこが主催するプログラムに対する援助(40%)、3) ノルウェーと対象国の研究機関との間の研究協力に対する援助(10%)からなる。全体のプログラムは、現地における食物生産の発展的改善と持続的生産システムのための自然環境改善を目的としている。研究活動の位置づけは、研究機関と研究組織、NGOをサポートできる行動志向の研究、対象地域のノルウェー人の研究能力などの向上におかれた。その手段として、ハルトゥーム大学の研究基盤の発展(図書室の施設整備、コンピューターやコピー機などの事務設備、植物学・地理学の調査機材やランドクルーザーなどの奇贈)が達成された。また、現地でノルウェー赤十字とスーダン赤十字が合同で行っていたNORCROSSという開発プログラムの活動とも協力体制が築かれた。

前掲書『乏しい資源での生存』の巻頭においても、「開発研究」と「北・南研究者協力」に力を尽

くして亡くなったベルゲン大学長に謝辞が述べられている。このプロジェクトは、1980年代と90年代のノルウェーで一般的となった研究形態で、有用性が高い応用的な学際研究が求められていた、という。そこには、国連に対する協力政策を長く外交の基本とし、積極的な対外援助を実施してきたノルウェーの政治的特徴が反映されている。

国連環境特別委員会(正式名称は「環境と開発に関する世界委員会」、日本の提案をきっかけに1983年に設立)によって1987年にまとめられた報告書『我ら共有の未来(Our Common Future)』では、先進国と開発途上国が協同して環境資源の保全に配慮しながら「持続的開発」を目指すことが提唱された。この報告書が世に問われて以降、「持続的開発」というキー概念は広く知られるようになっていく。委員長は、環境大臣を経てノルウェー首相となっていたグロ・ハーレム・ブルントラント女史(Gro Harlem Brundtland)、そして副委員長は元スーダン外務大臣のマンスール・カーリド氏(Mansour Khalid)であった。この中では、科学者のコミュニティーの役割を増大させる必要性もはっきりと述べられている(環境と開発に関する世界委員会『地球の未来を守るために』福武書店、1987年)。

紅海のプロジェクトが大規模な学際的研究となりえた理由として、じつはこのような背景が存在していたのである。スーダンにおける開発と関連した現地調査を続けてきた「人類学者」らが中心となって、人文・社会科学

者が自然科学者らを統率する形で、「持続的発展」への基礎調査を目的とする「応用的学際研究」が発展したのであった。ノルウェーでは1991年以降NUFU (Norwegian Universities' Committee for Development Research and Education) というコミッティーが設置され、途上国における高等教育機関による開発研究の発展に対する援助に続けて力が注がれている。

そして、現在、途上国における共同プロジェクトを見わたした時、必ずしも開発と直接的に関わっていないようなものにおいても、ベルゲン大学など北欧諸国とその研究機関が発展させてきた調査形態は浸透してきており、それが共同研究のあるべき姿としての一つの雛形に成りつつあるようである。

例えば、エチオピアのアジスアババ大学の開発研究所においては、ノルウェーのトロンハイム大学やアメリカのウィスコンシン大学とのプロジェクトが進められている。また同大学内に建物をかまえ、「南・南研究者協力」をめざして創設されたOSSREA (Organisation for Social Science Research in Eastern and Southern Africa) は、前述のNUFUがバックアッ

プしている。このような状況も一因となって、同大学エチオピア研究所は日本の研究者とのプロジェクトにおける協力関係の变革を求めたという話をきいた。

この現状を見すえた場合、援助や開発と関わらない限り、大規模で生産的な学際的研究ができないのかもしれないと考えさせられる。また、そればかりでなく、国連やNGOとの協力関係のもとに行われる「北・南研究者協力」に匹敵するような共同プロジェクト体制を持たずには、北東アフリカの研究機関との協力関係が結べない日が来るのではないかという危機感さえおぼえる。

#### スーダン研究者達の新たな展開：総合的ハドラー研究へ

以上のような発展をみせたベルゲン大学によるスーダン研究であったが、1990年代に入ると、人権問題を始めとするスーダンの政治的関係、またハルトゥム大学自体のアカデミックな自立性が問われ、1993年をもって正式な協定は終了してしまった。

スーダン研究者たちはそれ以降どのような研究へ向かっているのでしょうか。マンガー教授は現在進行中のハドラー（アラビア半島南部ハドラーマウトを

中心にネットワークを発達させた人々）の研究プロジェクト計画書を私に見せてくれた。マンガー教授自身は、スーダン西部や東部での調査を通じてハドラーミーの移住に関する関心を深めていた。一方、オファーヒー教授はイドリース教団の拡大などの歴史研究からハドラーミーの活動に注目していた。これらの問題意識が、このプロジェクトへとつながっていった動機であるという。

スーダンにおいて成熟した学際的研究のノウハウを、総合的ハドラーミー研究に発展させていくベルゲン大学の研究者たち。今後も目がはなせないという期待と、自分自身の研究に対するさらなる情熱とともにノルウェーをあとにした。

付記 本レポートは、平成10年度文部省科学研究費補助金（創成的基礎研究費）「地球環境攪乱下における生物多様性の保全及び生命情報の維持管理に関する総合的基礎研究」の研究協力者として行われた調査にもとづいている。

（なわた ひろし 京都大学  
大学院人間・環境学研究所）